

植込み型LVAD装着の決断に子どもの受け入れが左右した1例 ～RTCとしての意思決定支援～

*¹東京大学医学部附属病院看護部, *²東京大学医学部附属病院循環器内科, *³東京大学医学部附属病院心臓外科,

嶋田 朝子*¹, 遠藤 美代子*¹, 大江 あゆみ*¹, 神野 美希*¹, 割田 陽子*¹, 網谷 英介*², 小野 稔*³
Asako SHIMADA, Miyoko ENDO, Ayumi OOE, Miki KANNO, Yoko WARITA, Eisuke AMIYA, Minoru ONO

1. 目的

植込み型LVAD (left ventricular assist device) 治療は患者が自宅で生活を送れ、治療しながら社会復帰もできる方法¹⁾であり、生活と治療を両立して社会的役割を果たせることは重要である。今回、患者だけでなく植込み型LVAD適応患者の子どもにも介入したことで、患者が装着の決断ができ、退院後に母親の役割を果たせた症例を経験したため、報告する。

2. 症例・方法

拡張型心筋症をもつ40歳代の女性は、夫と女兒(学童期)と3人暮らしで、当院にて心臓移植希望登録を行った。その後、心不全が増悪し、医師からLVADの必要性が説明された。

レシピエント移植コーディネーター (RTC) として、患者と外来でLVAD装着の意思決定支援のための面談を繰り返した。面談の中で患者が腑に落ちていない理由として、患者の治療について説明していないため、子どもが家族内で疎外感を感じ、病院は母を奪う存在と思っていることが影響していることが分かった。そこで子どもへの説明の機会を設ける必要があると考え、患者・家族の希望も確認し、子ども療養支援士 (child life specialist, CLS) と主治医とともに子どもへ説明する場を設けることとした。説明内容は事前にCLSと検討し、その後患者と内容を共有して説明に臨んだ。子どものために話をする機会を設けたことを伝えることが大切であるとのCLSからのアドバイスをもとに、説明当日は人形にLVADの模型を用いて説明を行った。説明後、子どもから「お母さんを一緒に守る」との発言があり、子どもの反応から患者はLVAD装着を決断した。退院

後、自宅で家族3人での生活が送れ、母に甘えられるようになり、患者が母親の役割を果たせるようになった。

3. 結果

患者は心臓移植登録当初からLVAD装着の必要性を理解していたが、子どもに関する発言が多くみられた。RTCとして患者と面談し、LVADが必要という段階でも子どもへ治療の説明できていないことが、LVAD装着の意思決定に影響していることを把握できた。CLSに事前に相談し準備をしたことで、有効な説明を行うことができた。

意思決定支援の際には、意思決定支援者となりうる家族への介入も望ましい²⁾との記載があるが、未成年の子どもを支援者と想定することは少ない。今回の症例では、子どもも患者の生活の一部であり、意思決定支援者となりうるということが分かった。また、本来であれば意思決定支援の際の介入は患者へ行うが、意思決定支援者が治療に協力できるような介入によって患者の適切な意思決定へとつながり、その後の治療にもつながった。

4. まとめ・独創性

意思決定支援の際に患者だけでなく家族に対して支援することで、患者の支援につなげることができた。患者を支える家族への支援にもなり、退院後の生活と治療の両立にもつなげることができると考える。また、専門家へ相談することで、よりよい意思決定支援へつなげることができる。

本稿のすべての著者には規定されたCOIはない。

文 献

- 1) 日本臨床補助人工心臓研究会：我が国における植込型補助人工心臓適応化の考え方：Destination Therapyについて。平成27年3月
- 2) 厚生労働省：認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン。平成30年6月, p.8

■ 著者連絡先

東京大学医学部附属病院看護部
(〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1)
Email. SHIMADAA-NUR@h.u-tokyo.ac.jp